

良心

——八十二歳、発^{はつ}猛^{もう}の志——

対談撮影 鶴田孝介
学内撮影 渡邊 修



●京都造形芸術大学理事長・東北芸術工科大学理事長

徳山詳直

(とくやま・しょうちよく)

●本誌主筆 京都造形芸術大学教授
京都造形芸術大学／東北芸術工科大学共同研究機関「文明哲学研究所」所長

井原甲二

(いはら・こうじ)

国民に信義を果たすべき政治が、その責務を放擲^{ほうてき}して極めて貧弱な様相を呈し続け、国民もまた、その政局化したドタバタ政治を劇場の観客と化して模様眺めを続ける——これで果たして国家といえるのだろうか。日本を、人を、若者を愛するがゆえに、現代文明への深い反省と壮絶な苦悩の果てに見出した「良心」という一滴^{しちてつ}の雫^{しずく}を、「芸術立国」という構想の中に投げ入れて、この国を立ち上げようとしている学校経営者、それが徳山詳直氏である。青春時代に「死を覚悟」した革命運動に身を投じ、そこで「吉田松陰^{よしただしやういん}」と邂逅^{かいこう}し、松陰の潰^{つぶ}えた夢を果たさんと、国家の根幹をなす教育の道において愚直なまでに闘争を続けてきた。しかし、それでもなお「未だ、何も成し得ていない大きな責任がある」と、日々猛を發する。八十二歳の猛士、その千里の志をあますことなくここに發露する。

縄文の都と弥生の都をつないで 日本列島の中心的心棒をつくった

井原 先ほど、京都造形芸術大学の入学式に参列させていただいて、徳山先生はじめ、千住博学長、浅田彰大学院長の新人生に対するメッセージ、それから松平定知教授による「京都文藝復興」の朗読も聞かせていただきました。本当に考えさせられるものがありました。ありきたりの言葉ではなくて、先生方が「教育を通して世の中を変えていこう、芸術を通して平和な社会にしていこう」とされている強い意志を感じました。特に徳山先生の言葉には深く感動いたしました。まるで、私に語りかけてくださっているかのようなお言葉でした。

今日は先生のご半生をお伺いしながら、私たち日本人が、いま、そして今後どのような生き方をすべきかを考えていきたいと思っています。

まず、取り上げたいのは三つのキャンパスのことです。この京都造形芸術大学のほかに山形に東北芸術工科大学、東京には外苑キャンパスである東京芸術学舎もつくりましたが、東北芸工大もこちらと同じように山々と壮大な景色を遠望できる素晴らしい場所に建てられていますね。

徳山 あの山形の場所は、本当に素晴らしいところです。僕のいちばん好きな小説家である山本周五郎の作品に「樅ノ木は残った」というのがあるんです。江戸時代、仙台の伊達家のお家騒動によって苦しみ、戦い、死んでいく原田甲斐という家老の話です。これを何度も何度も読んだ。原田の苦しみは、それはそれは大変なものだったけれど、彼は「わしはこのように生き

る」と腹を決めて自分の生き方を貫いた。それを読みながら蔵王をはじめ東北各地を自分で運転して何カ月もかけて回ってみたくんです。そして分かったことは、山形は縄文の都だということでした。縄文なら日本全国にあるじゃないかと言うかもしれないけれど、大和朝廷に追われた人たちが守ってきた縄文文化の最後の砦が山形だと、いろいろ見て確信しました。それで、蔵王の麓の耕源寺の鐘樓堂の前に筵を敷いて二年半、雨の日、風の日、雪の日、照る日、曇る日、暑い日、寒い日、そこに座って月山に沈む夕日を見ながら、極楽浄土を思いながら、いろんなことを考えた。そして、月山、湯殿山、羽黒山の出羽三山の気呼び込めるような設計でここにつくろうと思った。県も市も、ほかの土地を薦めてくる。地権者の反対もあった。でも、僕は、京都という「弥生の都」と、山形という「縄文の都」を結びたかった。橋を掛けたかった。それを日本列島の中心的心棒にしたいと思っていた。だから、あそこじゃなかったら駄目だったんです。

でも、文部省も東北芸工大の設立を許可しなかったと言っていたんです。僕は「不許可の理由が見当たらん。だったら東大以下全部不許可にせえ」と言って、「文部省相手に裁判する」とまで言って、やつと勝ち取ったんです。生きているうちに東北と出会えたことを生かさなきゃいけない、その一念だった。

井原 山形は私のふるさとしてから、情景が浮かびます。東北芸工大には何度か伺ったことがあります。

徳山 東北芸工大の正面には池があって、橋がかかっています。ご存じですね。

井原 網走の古い刑務所に何度も通って設計された「鏡橋」だそうですね。

徳山 そうです。罪を犯した自分の姿を水面に映して脳裏に焼き付けて刑務所に入り、出てくるときは、もう一度映してどんな顔に変わっているかを確かめる。そのことがその後の人生にどんなに大きな影響を与えるか。そういう鏡橋です。ですから学生たちが入学するときの自分の姿を池面に見て、卒業するときには少しは賢くなったか、成長したかな、と見られるように作ったんです。

その隣には、能舞台を作りました。これも大反対に遭いました。それでも作った。あれは湯殿山を遠望する位置になっています。湯殿山の「気」が全部大学に入ってくるように、それを何かで受け止めるときに、能の舞台がいちばんいいと考えたからです。その「気」を学生たちに分け与えてやりたいんです。

あの鏡橋と能舞台の下を通っている水は蔵王から流れてきた水で、それがいったん大学を通過して、そして下のお百姓さんの田んぼに入っていくように作られています。

井原 そうなんですか。いやあ、それはすごい。この京都造形芸術大学も考えぬかれて建てられていますし、「人間館」という建物よりもさらに階段を上って「直心館」や「興心館」「千秋堂」などへと行けるようになっていのも、人間教育の表れだと分かります。

徳山 すべて自分で考えた設計です。そうしないと、創設者としての考えが浸透していかない。

井原 京都大学の総長を務められた平澤興先生が、この大学の学長選出の条件の一つとして「徳山詳直と終生、運命とともにする覚悟があること」とおっしゃったそうですが、よく分かります。日本広し、といえどもこれほど創設者の志が強く込められた大学はほとんどないに等しいですから。



京都造形芸術大学瓜生山キャンパス正面全景



徳山 詳直 とくやま・しょうちよく
京都造形芸術大学理事長・東北芸術工科大学理事長。1930年(昭和5) 島根県生まれ。同志社大学時代、革命運動により7回投獄される。獄中で読んだ『吉田松陰』の影響を受けて、「昭和の松下村塾」をつくることを決意。77年、学校法人瓜生山学園京都芸術短期大学を設立。91年、京都造形芸術大学を開学。92年、東北芸術工科大学を山形市に設立。2010年、東京・神宮外苑に、京都造形芸術大学と東北芸術工科大学が企画プロデュースする新型アートカレッジ東京芸術学舎を設立。著書に『藝術立国』(幻冬舎)がある。

徳山 あれは、まいったなあ……。一つ目の「世界的に有名な学者であること」、二つ目の「教育に命をかける人」、三つ目の「私学の経営の分かる人」、ここまでは探せばあります。しかし、四つ目は不可能。徳山とやったら心中してもええと思える人……。あれは、まいったなあ。だって、僕はあのころまだ三十代後半のちんぴらみたいな人間で、こんな男と心中しようなんて思う人、どこにいますか？ それを言ったら平澤さんは「おるやないか。おまえ、どこ見てんねん。わしがおるやないか」と。

井原 平澤先生がどれだけすごいお方かは存じ上げておりまし

名な先生方がハンコについて反対したんです。でも、僕がお願いしたんじゃないくて、平澤さんが自分で「俺おれしかない」と言っただから、僕は「平澤先生に直接言ってください」と相手にしなかった。でも、平澤さんは「徳山の言うことしか聞かない」と言ったらしく、みんな諦めるしかなかった。そのときあれだけ反対した先生方も、後にはこの学長になりました。平澤さんが「わしが言うてくる」とちよつと行ってくると、学長なんかならん、と言っていた人も学長を引き受けたんです。最初、医者である平澤さんと私は、子供病院の設立を考えていた。私には脳性麻痺まひの次男がおります。もう五十歳に近い。生きる屍しかばねの状態です。こういう障害のある人たちは長期の療養と看護が必要で、私はそういう病院を作って、院長を平澤さんにやってもらおうと思っていた。

私はこの子がいなかったら、今のような戦いを続けていなかったかも知らん。金儲けもち商売をやったかもしれないと思う。苦しくてもつらくても、この道を行こうと思うのは、この子がおるからです。まことに不幸やけれど、その不幸が私を支えてきた。松陰が私に授けてくれた子供かも知らん。私はこの子が生きている限り死ねない。

革命運動で逮捕・投獄の青春時代 そこで出逢った「吉田松陰」の志

井原 先生は、東北芸工大を「日本列島の心棒まで考えての設立だった」と言われましたが、そのことや今のお話を伺うと、やはり徳山先生の心には吉田松陰が生き続けているんですね。

徳山 そう。十五歳のときに日本が戦争に負けた。お国のため

に少年航空兵になって戦おうと思っていた矢先に。学徒動員に出たけれど、肺結核で隠岐へ静養に帰っていたときに終戦になった。僕は同志社大学に入って十九歳のときに日本共産党に入党して、二十歳のとき革命運動で逮捕された。僕は七回もブタ箱に入ってるけれど、ほんまに革命家になろうと思って、死を覚悟して入党してるから、取り調べで何を聞かれても黙秘で通した。そういうときに母親から本が送られてきたのが奈良本辰也の『吉田松陰』だった。大阪の姉が送ってくれと言付けたみたいでした。そこに母親からの手紙も入っていた。「自分の信じた道だから、どんなことがあっても最後までがんばりなさい」と、隠岐島の年老いた母親が書いていました。でも、「今日は、あんたに忠告したいことがある。それをよく記憶に留めておいてください。どんなにつらいことがあっても、友達だけは裏切るな。これが母の願いです」とあった。そして最後に「母のことは案ずることはありません。元気で」と結ばれていた。

わずか二十九歳で刑死した松陰でしたが、「至誠にして動かざる者は、未だこれ有らざるなり」という孟子もうしの言葉を座右の銘にしていたんですね。それより前、二十四歳のときには、ペリーの軍艦に乗り込んで捕らえられ、下田から伝馬町てんまちょうへ連れて行かれる途中で、赤穂浪士の霊に手向けて「かくすればかくなるものと知りながら やむにやまれぬ大和魂」と詠んでいる。自分の運命を浪士たちに重ねたのでしょうね。でも、彼のそうした「世の中をなんとかしなければならん」という気持ちがい小役人に通じるはずもなく、それでも日本の将来について誤魔化さずに自説を語った。そこが、吉田松陰は論客ではあったけれど、戦略家ではなかった。市井の人でした。そこで勝負をした。言ってみれば「策なし」という生き方でした。まったくの無手

勝流。馬鹿^{ばか}だった。一途^{いちず}に誠実な人だった。それが自分の命を縮めたのだけれど、そこには一点の曇りもない。そういう松陰のために、松陰がやらなかったことを日本のために、命をかけてなんとしてもやりたい、真似事^{まねごと}でもしたい。僕は、この本を読んで、日本共産党よりも松陰のほうが好きになってしまった。人生を松陰にかけようと思った。

釈放されたその足で僕は共産党の幹部十一人に呼び出され、夜十時にこの大学が建っている瓜生山に連れてこられ、査問を受けました。当時、日本共産党は暴力革命を推進することを決定したばかりでした。だからなおのこと僕がしゃべったんじゃないかと疑っているんです。僕は何もしゃべってはいない。自分の名前さえ言わなかった。本当はしゃべりたかった。でも、母親からの手紙に「友達だけは裏切るな」とあったから、一言もしゃべれなかった。ただ、釈放の書類にサインしないといけなかったから、そのとき初めて名前を書いた。そんなことは知らない幹部連中が、「君がしゃべっていないという証拠はあるのか」と言う。そんなものあるわけがない。僕は「おふくろの手紙が来たから、しゃべらへんかった」と言うのはやめた。銅鉄の思想を持つ「日本共産党・ボルシェヴィキ（過激派）」やという自負もあつたし、そうあるべきやと聞かされていたからだから、「あなたたちが、ここでこうしているということが僕がしゃべっていないという証拠だ」と言った。

連中が帰ったあと、僕は一人で山に残って、枯れ葉の上で寝ました。起きたら、朝日が差した京都の町が一望できて、それはそれは美しかった。そのとき、ここにいつか学校を建てようと思った。起伏の激しいところだし、建物を建てるにはまったくふさわしくないとこそだけれど、ここしかないと思っていた

んです。

井原 入学式るとき、大きなガラス張りの窓の向こうに見えている山に向かって、一瞬ですが何事かを祈りになってから学生さんたちのほうへ向き直られました。そのとき向かっておられたのが、その査問を受けたところだったのですか？

徳山 そうです。見ておられましたか？ 誰^{だれ}にも言わないけれど、僕の戦いのシンボルに向かつての祈念なんです。瓜生山は長い歴史の中で戦場となったこともあって、若いいのちが散っていた場所でもあります。そこにまだまったくお金がないときに石碑を建てました。この山にいのちを散らせた多くの若者たちの御魂、それも供養できずに学校なんかやつても意味がないし、東京の外苑に建てた芸術学舎にも同じ意味が籠^こめられています。その石碑を拝んだんです。

僕がブタ箱を出て最初にやったのは、山口県の萩^{はぎ}にある松陰のお墓参りに行くことでした。でも、二十歳の僕にはお金がなかったから、平澤さんや、同じ京大の鳥飼利三郎、同志社大学の住谷悦治、高橋貞三といった先生たち十人くらいに話をして、六百円集めて行きました。電車賃がもつたいないから米子^{よなご}から先は貨車に潜り込んで無賃乗車しました。腹が減ってたけれど我慢して、丸一日かけて萩へ着いた。ところが、松陰のお墓はボロボロでした。ひどい状態ではあったらかしにされていた。僕は、「昭和の松下村塾^{しょうかの さんしやく}をつくります。見ててください。共産党とは決別します」と墓前に誓いました。その足で僕は萩の為政者たちに会いに行つて、「あなたたちは松陰なしに萩を語ることはできないのに、なぜあんなに汚いお墓のままにしとるんや」と怒鳴つて、大喧嘩^{おおげんか}した。萩は当時まだ町でした。町長さんが「そのとおりだ」と言つて、掃除はきちんとすることを約



「人間館」入口。ルイ・アラゴンの詩の一節が掲げられている



「人間館」の柱に彫られている文字は「思索」「情熱」「宇宙」「生命」「発見」「情念」



井原 甲二 いはら・こうじ
本誌主筆。1948年(昭和23)山形県生まれ。駒澤大学大学院仏教学専攻中退。93年5月、月刊『MOKU』創刊。2012年10月、京都造形芸術大学・東北芸術工科大学共同研究機関「文明哲学研究所」所長ならびに京都造形芸術大学芸術学部教授に就任。著書に『感性命』『どっこい人はそれでも生きていく』がある。

束してくれた。僕も、以来毎年、六十二年間お墓掃除に行っています。これだけが僕の唯一自慢できること。松陰に向かつて「ここまで来た、ここまで来た。そやけど、あんたやつたら、これからどうするんやろうなあ？ 俺はどうすればええねんや？ あんたやつたら、こうするなあ。じゃあ、俺もそうしよ」なんて話をすることもあります。

松陰に誓った共産党脱党だったけれど、簡単にはいきませんでした。一九五五年、「六全協」で日本共産党が平和革命への大転換を発表し、「武装闘争は左翼の小児病である」と言い出した。「民族解放闘争の先兵として戦う」という意気込みで、ピストルの練習もしていたころですよ。僕は、自分の青春をめちゃくちゃにした共産党が突然、「小児病であった」と虫のいいことを言い出したから腹が立って、「お前らこそ自己批判せえ」と言いたくて、日本刀を持って共産党の京都府委員会へ乗

り込んだ。なだめられて刃物沙汰にはならなかったけれど、脱党もできなかった。

松陰と新島襄の精神を生かすために 芸術立国を目指した大学を設立する

井原 学校設立の資金づくりのために牧場経営もされたそうですね。

徳山 授業料を払えなくて大学をやめさせられて、自分でお金をつくろうと、二十七、八歳くらいから三十三歳くらいまで岩倉の山の中で牧場をやっていました。牛や豚や鶏を飼って、土にまみれて暮らした。人間らしい生活やった。ところが、その場所に国際会議場が出来ることになって、土地の値段が一千倍にもなった。牧場を手放すのは残念だったけれど、そのときのお金を使うことで大学を始める元手にできると思った。

そのお金が出来て、いちばん最初にやったことは、僕にお金をくださった先生方に報告することだった。「元はといえば、先生方のお金があったからです。先生方の了解なしには使えません。まず、これは一度先生方にお返しします」と、土地を売ったお金を現金で全額積み上げた。そうしたら、同志社の法学部長だった高橋貞三先生がものすごく怒って、次に憲法学者の田畑忍先生も怒った。「お前は量の上では死ねない男や！」と。「みんなお前が学校をつくるというからあげたんや。この金でお前はちゃんと学校をつくれ。初志貫徹せえ。新島襄の精神をここで生かせ」と言われた。私の中では、新島襄と吉田松陰が繋がった。それで、この山をまず手に入れることにしたんです。

この瓜生山は歴史的風土保存地区で、家どころか鶏小屋も建

てられません。京都の東山三十六峰さんじゅうろっぽうの一つでもあるから、ここ以外は全部お寺さんが建っていました。ここだけが戦後手付かずのままだった。ここで査問を受けた。そのおかげで、僕はこの山が好きになった。だけど、建物はアカンと言う。地元の人たちも建設反対の旗まで立てて、それがズラッと並んだ。これはきつかった。俺のやろうとしていることは、市民の大反対に遭うようなことなのか、間違ってるのか、と悩んだ。だけど、何も後ろめたいことはない。それで、この瓜生山に市民が集まってもらった。千五百人くらいが集まった。ほとんどが反対運動の先頭に立っている共産党の議員たちを集められた人たちやった。そのときに「まだ見ぬわかものたちに」と題した大学設立の趣旨もつくった。僕はマイクを使ってこつこつと話をしました。吉田松陰のことから話をした。「私も共産黨員や。この山を命がけで愛しているのは私や。山を乱開発することなんかしない。学校を愛してるんや。日本のために立派な大学をつくりたいんや」。そんなことを必死で話した。一時間くらいしゃべったら、中の一人が「誰や、われわれを煽動せんどうしたんは。徳山さんは立派な人やないか」と言った。「建設反対のビラを配ったのも共産党か」という声も上がった。

それから市が設立の許可を出してくれたら、銀行が待ってましたとばかりに融資の動きを始めた。経済成長のころだから、大手銀行は、すぐにでも貸したい勢いやった。僕は、「簡単に貸してくれるな。そんなことしたら、うちの教職員が墮落する」と言った。けれど銀行は、「徳山さんやつたら無担保でええ。一億でも二億でも」と言う。あのころの一億いうたら、すごいお金ですよ。「あんたたちは私の仕事をつぶそうと思うて無担保でもええと言うてるんやな。それが銀行か。徹底的に調べな

さい。納得がいかんかったらやめなさい」と私が怒鳴ったら、逆に信用してくれて、以来、銀行のほうから来てくれるようになります。僕自身がじゃなくて、僕の考えてたことが正しかったからだと思います。一九七七年から始まった京都芸術短期大学は、九一年に四年制の京都造形芸術大学になったのですが、申請を出してから三年かかった。文部省の首を縦に振らせるのに、それだけかかった。そうやって、いろんなことが奇跡的に重なってつくることができたんです。

奇跡と言えば、アメリカの植民地としての首都・東京、明治神宮外苑に二〇一〇年、外苑キャンパス「東京芸術学舎」をつくることができたのもそうです。僕の願いである「芸術立国」を目指すには、京都、山形、東京を結んで本格的にやっていくしかないと思っておったけれど、あの場所は、戦争も末期になってもはやどうにもならんと分かっていながら、東条英機ひできが何万もの若い命に三八銃を担がせて、雨の中を戦場へ送り込んでいった、そして帰ることのなかった場所。あの御霊を慰めなかつたら、僕の人生は意味がない。明治を戦った吉田松陰をここで生かさなかつたら、昭和の松下村塾をつくる意味がない。そう思っただけで死に物狂いで働いて、学徒出陣の跡地にキャンパスをつくることができた。ほかの大学が「なぜ京都の大学なんや」と文句を言ったらしいけれど、委員会では圧倒的多数で承認されたようだ。これも奇跡としか言いようがない。

暗闇にも針の先ほどの光があるならば それをいつか必ず捕まえてやる

井原 京都、山形、東京が繋がって、点が線に、線が面になっ

たんですね。

徳山 六十二年もかかってしまったけれど。

井原 松陰は、生涯に「二十一回の猛を発する」という決意を込めて「二十一回猛士」と称していましたね。今、教育界に猛士と呼べる人がほとんどいません。創設者の建学の精神が、徳山先生のように具体的な行動として伝えられていない。それが日本の抱える大きな問題だと思うんです。

徳山 吉田松陰はすごい人です。言葉では申し上げられないほど、すごい人です。十五歳くらいから書いていたものを集めた松陰全集を見ると、若者が書く文章なのかと思うほど大哲学が書いてある。ソクラテスにだって書けないでしょう。

井原 その哲学を行動にし、形にした昭和から平成にかけての人物が徳山先生です。お話を伺いながら、言葉ではない、「魂」が目の前に飛び出してくるような感じがします。

徳山 僕は、やろうと思ったことは正面から遮二無二ぶつかって、策を弄（ろう）することをしなかっただけです。もし人類が生き残るとしたら、戦争という力で勝ち残っていくものではないはずです。すべての人を愛せなかったら人類は人類として生き残れない。それを可能にするのは芸術で、その向こうにある宗教の力かも分からん。いずれにしても、世の中に愛が足りないから、この大学があるんです。

でも、人類は生き延びなくてもいいのかもしれない、とも思う。人に代わって、まったく新しい種がこの地球をきれいにしてくれるかも分からん。そうすると、人類は不要やね。でも僕は悲観的絶望論にはならない。楽観的絶望論です。生あるものは必ず滅びるのやし。そこに腹を決めたんです。

井原 「男子たるものは、一度戦って負けてもやめてはならな

い。二度目、三度目の戦いのあとでもやめてはならない。刃折れ矢尽きてもなお、やめてはならない。骨が砕け、最後の血の一滴まで流して、初めてやめるのだ」

この新島襄の言葉を、私は先生のご著書で知ったのですが、まるで自分に言われているようでした。と同時に、徳山先生はまさにこの姿なんだと思いました。

徳山 僕は、本当に、そう思ってる。

井原 それを「発猛（はつもう）の志」とでも言いたいのですが、そういうものが芸術の根幹にあるべきものだと思えば、先生の大学はこれを賦活させるものだなと思わされた入学式だったんです。「私は命をかけてこの大学をつくった。芸術とは何だ。なぜ芸術を学ぶのか。青春とは何か。新しいいのちとは何か。それを考えなければならぬ。苦悩することもあるだろう。絶望することもあるだろう。しかし、死を思うときにもへこんではならない。そういうときは、この大学を抱きしめろ」。そんなことをお話しされました。「この大学を抱きしめろ」とは「徳山詳直を抱きしめろ」という意味ですものね。学生さんたちにとつて、これほどの指針はありません。

青春というのは、海と同じで、あるときは荒れ狂い、あるときは暗黒の世界でもある。道に迷うことも当然ある。そこで一筋の光を見つけるのはどれほど重要か。それが大学の意味だと思うんですが、いま、日本の大学はいい会社に就職するためのステップに過ぎなくなっています。哲学も、思索も、創造性も、何もない。学生たちが迷うのも当たり前です。だから、みんな迷っています。この国のそのおかしさを私を含めて大人が分かっている。おかしさが分からないから、日本人が内向きになつてしまっています。徳山先生がおっしゃったことは、大人が

学ぶべきことです。フランスの共産党のルイ・アラゴン（詩人・小説家）の「教えるとは共に希望を語ること、学ぶとは眞実を胸に刻むこと」という言葉が大学の入り口に掲げられています。教育というものがどういうものなのかを全身で教えていただいています。山に向かって拝される姿、それだけでも偉大な教育者の姿です。

徳山 そうですか……。僕は、そう言うてくださることを決して嫌な気持ちになつてゐるわけではないけれど、でも、自分ではまったく納得できていないんですよ。こんな程度じゃ、まだひよこだと思つてゐるんです。だから、「これから」なんです。八十二歳までは助走です。あと五年や十年じゃ死なない。殺しに來ても死なない。命は惜しい、なるべく健康に氣を付けなきゃいかん。医者にも言つてます「やりたいことがあるんだ」と。この世の中を見ていて、あの政治家たちの馬鹿面を見たらゾッとする。テレビ見てください。恥ずかしい。僕は自分の名前が雑誌や新聞に出ることも、とても恥ずかしい。もし記事にするなら、こういう馬鹿な男もいると書いてほしい。がんばつてもがんばつても、がんばり足りない、ちつともまともになれない男がいると書いてほしい。

僕は、毎晩必ず三十分、仏さんに手を合わせて拝んです。ご利益（りやく）を得ようと思つてるわけじゃないです。ただ、許しを請うてる。もし、神や仏がおるならば、こんなに無茶な世の中が出来るはずがない。そう思いながらも、やっぱりおるかもしれないと思う。おるんだったら、なぜこんな世の中が出来るんや。今まで、何百億もの、何千億もの人間が亡くなって、その魂が宇宙を徘徊（徘徊）してるところがありますか？　なぜこんなにむごたらしい世の中を見て見ぬふりするんだ、あんた方は

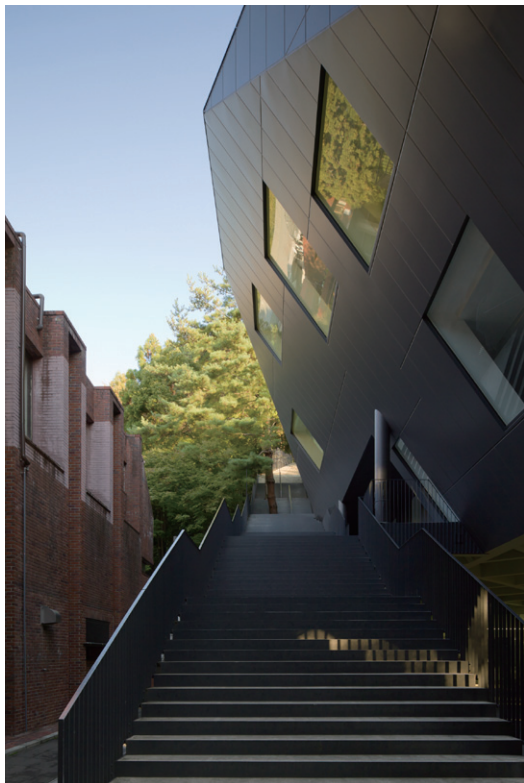
何のために拝まれてるんやと、いつも神さんや仏さんに叫んでる。もし、何か考えがあつて、意味があつて、神や仏が人間を苦しめてくれてるんやったら、その針の先ほどの光をいつか必ず捕まえてやろうと思つて拝んでる。でも、「助けてくれ」とは決して言わない。助けてもらうほどのことは、僕はしていません。

井原 便利なものがたくさんある。でもこの世の中は闇（やみ）です。

その中で、少なくとも先生の存在が光となる人間がいるんです。私は六十三歳の今、命とは何だ、生きるとは何だ、おまえ自身とは何だ、ということに答えることができません。失敗の連続でした。でも、先生の存在が私に教えてくださっていることは、「おまえは大したことはない」ということ。新島襄の言葉のとおりです。徳山先生の生き方を通じて、吉田松陰や新島襄と出会

っているんです。そして、「ああ、自分もそのように生きることができるのだ。命をかけて自分を生きることができなのだ」という教えを先生は説いていらつしやるのです。それは、私に對してだけでなく、新人生たちにも「君たち、自分を見出して、自分に賭けて生きてみろ」とおっしゃっているのですね、言葉としてではなくて。明確で、輝く建学の精神を生き様として伝えている創設者は非常に希少ですし、これこそ吉田松陰が育てたものだろうと思います。それを一言で表すならば「猛を発する」ということになるでしょう。芸術を武器にした革命の戦士がいたことを、私は日本人として誇りに思います。

徳山 僕の仏さんを一度見に来てください。見たら分かります。仏さんが何かを語ってくれます。僕はいつも会話をしてる。決してやさしい言葉はかけてはくれないけれど、にこやかに微笑（ほほえ）んでくれる。すべてを許してくれてるかもしれない。もつと



至誠館（右）と308段の階段



茶室「颯々庵」

苦労せえ、それくらいじゃアカン、とも言ってくれる。

この大学を建てるときにお金がなかったから、大事にしてる
仏さんを売りに出そうかとも思った。天下国家のために貧乏人
を救うのが仏さんの役目やないか、と言ってね。もつとええと
ころへ行って大事にしてもらえればええんやから、俺を恨むな、
と。毎日、毎日、そんなことを思ってた。今日はお金が出来
た。今日も何とかできた。そういう日が続いて、毎日、帰ると
仏さんにキスをして、今日は売らんで済んだ、でも明日は分か
らん。朝出るときは、今日はどうなるか分からんけれど、恨む
なよ、と言って出かけてた。泣き笑いを繰り返してる間に、仕
事がうまくいきはじめた。苦しみはあったけれど、つらいとは思
わなかった。もうやめようとも思わなかった。「ここが勝負
どころや。これ乗り越えるのが仕事やないか」と。ここまで

「いま、ここに、学園は新しい出発の時を迎えようとしています。

この時にいたって、私は、一つのためらいをかくすわけにはいかな
いのです。

今日の状況下で大学をつくることの物理的な困難についてはいうま
でもありませんが、もつとも大切なこと、——それは、高い理想を掲げ、
わかものたちを集める教育研究の場に当る者は、みずから未来への展
望と、それを実現させていく深い思想を持たなければならぬ、集ま
ってくる群像にむかって、『かく生きるべし』と堂々と語りかけるもの
を持つていなければならない、ということ。す。（中略）
ただ、就職のためには卒業しなければならぬから、単位だけはと
にかく取っておこうとします。また先生は、そうしたきみたちを見て
特別な苦痛を感じるわけでもありません。

そこには冷たい断絶の関係があるのみで、学生生活はみのり少なく、
空虚で生半可な知識だけを詰めこんで卒業してしまふのです。

私はそんな大学はぜったいにつくりたくありません。

この短い期間にいかほどのことをきみたちに与えられるかは疑問だ
けれど、ぜひ伝えたいのは、

なにが美しくてなにがみにくい

なにがほんとうでなにが嘘か

ひとを愛するとはどういうことなのか

人間とはどんなものか

いかに生きるべきか

などといったことにつけると言えましよう。」

「まだ見ぬわかものたちに――瓜生山学園設立の趣旨」より

なら誰でもできる、ここから先ができんのやと。人ができない
ことをやってこそ、したことになるんやと。そう言い聞かせて
生きてきた。僕は、ずっと不可能なことだけに挑戦してきた。
それが趣味だったと言っててもいいくらいに。

**今生きていることに責任を感じている
八十二歳まで禄を食んで何をしてきたのか**

井原 私はいま自分の感覚が不思議なんです、六十三年間の
さまざまなことが、「なんともない」という状態になっています。
先生が査問されたところに一緒にいるような感覚です。そして、
明け方に寒くて震えたとおっしゃるあの感覚にもなっています。
東北芸工大の裏のお寺の鐘楼堂の下に筵を敷いて上の山のほう

をずっと見ている感覚もあります。先生が書かれた「まだ見ぬ
わかものたちに――瓜生山学園設立の趣旨」「京都文藝復興」な
どの文章も、私の中で昇華されていきます。
徳山 「まだ見ぬわかものたちに」は、書くのに五年かかった。
今でも読んでます。

井原 もし、新島襄が現代に生きていたら、ここに書かれてい
ることと同じようなことを言ったんじゃないでしょうか。吉田
松陰が現代に松下村塾をつくるとしたら、こういうことを発信
したんじゃないでしょうか。福沢諭吉や大隈重信の言葉を語る
大学があります。しかし、建学の精神を語り続け、実際に行動
されている教育者となると、さてどれほどいらっしゃるでしょ
う。

ルネサンス以降の近代文明が世界を席卷し、欲の肥大化を招
いて、めちゃくちゃになっている。しかし、それを正すために
やはり芸術が必要なのだ、と言う人がいない。芸術という叡智、
知性、それが人間にはある。それをやるのがこの学園なんだと
明言されている。先ほど、千住学長が「世界の共通項で語り合
え」とおっしゃっていましたが、徳山先生の建学の理念は地球
の共通項になり得ます。もつと言え、宇宙の共通項でしょう。

今日の理事長の姿を、あそこにいらっしゃった学生さんたち
は、五十歳になって、六十歳になって、あるいは挫折したとき
に思い出されるでしょう。そのときに、どれほどの助けになる
でしょうか。六十をとうに超えた私が、こんなことを言うのは
馬鹿なのかもしれませんが「赤誠」という人間の核、心棒が人
間からなくなったらお終いです。

徳山 うん。ずたずたにされてもいい、一人で戦う、そういう
気概がなかったら仕事はできない。人がついてきません。人の



至誠館屋上より京都市内を望む

「二十世紀は、科学と技術の長足の進歩とはうらはらに、混沌と汚濁に満ちた世紀であった。

国家、宗教、民族間の果てしない対立と闘争、貧困と飢餓と殺戮の悲しむべき世紀であった。

遠く十三世紀末、ルネサンス期に湧き起った人間賛歌の思想は、人間の存在を万物の至上におく近代思想となり、やがて欲望の歯止めのきかない激流となって、ついには人類自らを生存の危機に追いやった。

（中略）

学生諸君、

この時代、この日本の姿を、

きみたちの鋭く純粹な眼でじっと見つめてほしい。

（中略）

東洋の思想と叡智を基調とする、人間精神復興の壮大な実験と冒険に挑む勇氣と、芸術文化探求への絶えることなき研鑽が、人類を希望ある未来へと導くことを信じ、学問と宗教、芸術と文化の都、

この京都の地から発する文芸復興の鼓動が、日本の魂を静かに深く揺り動かすことを願って、ここに新たな出発を誓う。」

「京都文藝復興」より

力を梃子にして生きるなんてことは大間違いです。僕の言う戦いとは、殺戮の武器を手にしたものではないです。全身を「良心」にしていく戦いのことです。その戦いをし続けて死んでいく。人間の魂とは何か。それは良心です。人類に残された道は良心の復活しかない。八百人以上もの人がノーベル賞をもらったのに、人類はちつとも賢くならんのはなぜなんか。考えるなあ。

井原 馬鹿でいいじゃないか、発猛し続けるしかないじゃないか、と思います。人生の大先輩である徳山先生が、身を以てそう教えてくださっています。

徳山 うーん。考えさせられるね、そんなふうに言われると。自分では気が付かないことが多い。ええ年してるのに、いまだに少年のようなことを考えて生きてる。そういう自分の愚かさが、恥ずかしいと実は思ってる。でも、そんなふう言われると、少しは自分も大人になってきたのかも分からん。

ただね、これだけは申し上げたいのだけれど、僕はね、非常にね、責任を感じているんです。今生きていることに、とてもとても重たい責任を感じてるんです。八十二歳まで生きてきたしかるに、俺はいつたい何をして生きてきたんだ、というね。八十二歳まで禄を食んで、この世にお世話になって、俺は何一つしてやることができなかった。若者たちがかわいくて、かわいくて、かわいくて、かなわん。だって、僕らの責任でこんな世の中にしてしまった。それなのに、いまだ多くの人が年寄りを大事にせえと言う。当たり前のことちゃ。大事にしたらええ。反対はしない。しかし、年寄りは責任を取らないかん。何も責任を取っていない。本当は、「わしらを粗末にしてもいいから、おまえたちは賢くなれ」と若者に言ってあげる年寄りにならない

いといかんのですよ。何が大事かって、若者がいちばん大事です。年寄りはほっといたらい。私はそう思う。この世の中の問題を全部若者たちに押し付けて、責任を取らない。「消費税を十パーセントにする」と言って、それに命をかけると首相が言う。もっと命をかけるべきものはほかにある。なんという愚かなことか。

井原 おっしゃるとおりだと思います。

徳山 八十二歳だから、もう大事にしてくれとは思ってない。もっともっと俺をこき使え、くたくたになって血も涙も出なくなってしまうまで、俺をこき使え。俺はそれに耐える。そして、耐えなければならぬ理由がある。それは、今日まで生きてきて、何もこの世のために役に立たなかったから。この学校が出来ただけ。「これからが勝負や」と言うのは、そこなんです。

とにかく、よろしく頼む。

井原 ああ……私は本当に納得しました。私ももう一度やろうと思います。感謝します。人生の先輩に出会えた気がします。生きると言うのは、こういうことかと思いました。言葉ではなくて、生きる姿として教えてもらいました。

徳山 ありがとう。今でも夜中に一人で泣いてることがある。いろんな意味で泣けてくる。みんな人間は孤独なんや。今日、こうしてお会いしたことが、僕にとっては非常に大きな財産になりました。感謝します。

井原 私の六十三歳の人生、大小の失敗数知れずでした。しかし、ここでもう一度、いや、骨が碎けるまで、最後の血の一滴まで、自ら猛を発して生きようと思いました。新たな青春に向かって歩き出します。ありがとうございました。